

詩 III

- | | | |
|-----|-------------|-------|
| I | 19世紀前期のロマン派 | 加納 秀夫 |
| II | ヴィクトリア朝の詩 | 増谷外世嗣 |
| III | アメリカ詩の形成 | 亀井 俊介 |

著者略歴

加 納 秀 夫

1911年 広島県に生まる

1934年 東京大学文学部英文学科卒業

現 在 東京都立大学人文学部教授

主 著 『イギリス浪漫派詩人』(研究社)
『ワーズワス』(同)

増 谷 外 世 嗣

1924年 滋賀県に生まる

1948年 東京大学英文学科卒業

1952年 同 大学院修了

1962年 ハーバード大学留学

現 在 一橋大学社会学部教授

亀 井 俊 介

1932年 岐阜県に生まる

1955年 東京大学文学部英文学科卒業

1955～63年 同 大学院(比較文学)に学ぶ

1959～61年 ワシントン大学大学院(アメリカ文学)
留学

1961～62年 メリーランド大学大学院(アメリカ文
化)留学

現 在 東京大学助教授

主 著 *Yone Noguchi: An English Poet of Japan*
(造型美術協会); 『近代文学におけるホイ
ットマンの運命』(研究社); 『総合アメリ
カ年表』(南雲堂); 『ナショナリズムの文
学』(研究社)

講座 英米文学史第3巻 © H. Kano, S. Masutani,
詩 III S. Kamei 1972

1972年 4 月 15 日 初版発行 円 1200

責任編集 加 納 秀 夫

著 者 加 納 秀 夫

増 谷 外世嗣

亀 井 俊 介

発 行 者 井 上 堅

発行所 株式 大修館書店
会社

101 東京都千代田区神田錦町3-24

電話 (03)294-2221(大代表) 振替 東京 40504

組版・印刷 大文堂 製本 謙文社

装幀 原 弘 3398-140730-4305

目 次

I 19世紀前期のロマン派

——ロマン的想像力を中心に（加納秀夫）……………I

はじめに	3
1. 新しい想像力	3
2. 想像力の危機	5
ワーズワス	8
1. ワーズワスの詩	8
2. 生涯と作品	15
2. コールリッジ	29
1. コールリッジの詩	29
2. 生涯と作品	37
3. その他の詩人	42
1. スコット	42
2. サウジー	49
4. 時代の推移	53
5. バイロン	60
1. バイロンの詩	60
2. 生涯と作品	70

6. シェリー	79
1. シェリーの詩	79
2. 生涯と作品	89
7. キーツ	100
1. キーツの詩	100
2. 生涯と作品	110
8. その他の詩人	121
1. リー・ハント	121
2. その他の抒情詩人	122
3. ランダー	125
4. クレア	126

Ⅱ ヴィクトリア朝の詩（増谷外世嗣）

はじめに	129
1. テニソンとブラウニング	132
1. 時代と境涯と作品——二人の詩人を共に扱うことについて	132
2. テニソンの詩の内容と技法	141
3. ブラウニングの詩の内容と技法	155
2. アーノルドとクラフ	170
1. アーノルド	170
2. クラフ	184
3. メレディス	187
4. ペイターから世紀末へ	200
1. ペイター	200
2. ラファエロ前派の詩人たち	210
3. モリスからワイルド、イエイツへ	214

4. ハーディ	224
5. G. M. ホプキンズ	226

Ⅲ アメリカ詩の形成(亀井俊介) 249

アメリカ詩の形成	251
1. ピューリタン詩人たち	254
1. ピューリタンの詩的世界	254
2. ウィグルズワース	256
3. ブラドストリート	257
4. テーラー	259
2. 独立時代の詩人たち	263
1. 合理主義者たちの詩的世界	263
2. 「コネティカットの才人たち」	264
3. フリノー	266
3. ニュー・イングランドの詩的ルネッサンス	268
1. ロマン主義の勃興	268
2. ブライアント	270
3. ロングフェロー, その他のボストン詩人	273
4. ホイッティアー	276
5. トラセンデンタリストたち	278
4. アメリカ詩の独立	284
1. アメリカ詩の独立	284
2. ポー	285
3. ホイットマン	290
5. 鑛金時代の詩人たち	295
1. 鑛金時代の詩的風土	295

2. 地方詩人たち	296
3. 詩心の内向	298
4. ラニアとその周辺	301
5. ディキンソン	303
参考文献	309
事項索引	327
人名・書名索引	330

図 版 目 次

<i>Tintern Abbey</i> (ターナー作)	<i>facing</i>	40
<i>Childe Harold's Pilgrimage</i> さしえ (A. コーリン作)	〃	41
<i>Once a Week</i> さしえ (J. ミレー作)	〃	200
<i>The Ballad of Reading Gaol</i> (New York: 1937) より	〃	201
ポー夫妻の肖像	〃	280
<i>Leaves of Grass</i> 初版本の口絵	〃	281

I 19世紀前期のロマン派

——ロマン的想像力を中心に

加納秀夫

はじめに

1. 新しい想像力

1790年頃 *The Marriage of Heaven and Hell* (『天国と地獄の結婚』) を散文詩の形で書いていたブレイク (William Blake, 1757-1827) は、そこで「かくして人々はすべての神々が人間の胸のなかに住むという事実を忘れた」 (“Thus men forgot that All deities reside in the human hearts.”) という文章を刻んだ。それは18世紀の理神論にたいする叛逆の声であった。それがシェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) の時代になると、「思想革命を敢行する人々を詩人というのは、その人たちが革新者であり、真理の生命にかがやくイメージによって現象間に存在する不変の類似を文章にして語るばかりでなく、その美しい表現には調和とリズムがあり、詩の要素を含んでおり、いわば不滅の音楽をこだましているからである」という断定にまで展開する。¹⁾

まずブレイクの1行だが、これは人間の神性を暗示していると言えるだろう。人間に神性を予想すること自体が矛盾と言えば言えることだが、人間のもつ想像力、とくに詩的想像力について考えてみるなら、その創造性の点からしてそれを神的な力、すなわち神性という言葉によって表現して

1) P. B. Shelley: *A Defence of Poetry*, 1840. “All the authors of revolutions in opinion are not only necessarily poets as they are inventors, nor even as their words unveil the permanent analogy of things by images which participate in the life of truth; but as their periods are harmonious and rhythmic, and contain in themselves the elements of verse; being the echo of the eternal music.”

みることは可能である。いわば oxymoron とも言えそうな人間の神性と、この詩的想像力のもつ創造性を強調したものと考えたがよからう。

詩人はこの詩的想像力を恢復しなければならない。それはこの想像力が18世紀の理神論によって、いやその基調にあった18世紀的な科学思想によって危機に立たされていたからである。したがって、それは叛逆者としての態勢で立ち向かわなければならない問題であった。しかしこの問題には別な一面もあったのではあるまいか。すなわち詩人は各自がみずからの詩的想像力を理神論という一般思想の上において、その偉力を確信しようとした時、それぞれの詩人にそれだけの自信を与えうるものは何であったろうか。たとえばブレイクの散文詩から予想される詩人像については、それをなにか異常なものを含むと、人によってはファナティックなものをすらもつと、考える人があるかもしれない。またそれと同じ意味でシェリーの描く詩人像には理想主義に過ぎる傾向を読みとる人もあろう。ではこのブレイクとシェリーの中間に、つぎのように言う ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) を置いて考えてみることはできないだろうか——「この詩集に収められた作品の大部分は試作品と考えてほしい。社会の中流および下層階級の日常会話の用語が詩的な悦びを伝えるためにどれだけ役立つかを見たいと思って書かれた作品が主体である。」これは1798年の *Lyrical Ballads* (『抒情歌曲集』) 初版につけた「まえがき」の言葉である。¹⁾

ブレイクの言葉 (1790) とワーズワスの言葉 (1798) とシェリーの言葉 (1821年頃) を比較してみるなら、三人三様の詩人像が暗示されていることは言うまでもない。しかしワーズワスが「中流および下層階級の日常会話の言葉」を詩の言葉として試作を意図したことは——たとえそれがどの程度実行され、成功したかは別としても——この時代において注目すべき事実ではなかったろうか。もし詩人に中流階級なり下層階級なりを構成する個々の人間にたいする信頼がなくて、その日常会話の用語だけを詩語として用いてみようとする場合が考えられるだろうか。詩の用語はその内容と密接な関連の上のみ成立するものである。ワーズワスの言葉を含む

1) *Lyrical Ballads*, "Advertisement," 1798. "The majority of the following poems are to be considered as experiments. They are written chiefly with a view to ascertain how far the language of conversation in the middle and lower classes of society is adapted to the purpose of poetic pleasure."

「まえがき」をつけた *Lyrical Ballads* について、「ワーズワスはこの詩集において社会的矛盾の悲しむべき犠牲者たちに視線を集注する」という批評家もいる。¹⁾ そこに感じ取られるものはゴドウィン (William Godwin, 1756-1836) の思想傾向やフランス革命の体験を通り抜け、それらの直接的な刺激から脱却した後のワーズワスが見出した人間性にたいする近代的な信頼感である。それはまた「人々はすべての神々が人間の胸のなかに住むということを忘れた」という散文詩の1行をブレイクに書かせた信念ではなかったろうか。たしかにブレイクの表現は奇矯かもしれない。しかしそれが奇矯に思えるそのこと自体が、逆説的ではあるが、既定の主義主張を脱却した詩人自身の信念の告白ということを証明しているようにも考えられる。またブレイクとワーズワスの間には約10年間の相違がある。この10年近い歳月の間には近代的な人間観の成熟ということも予想されるだろう。

同様のことはワーズワスとシェリーの関係についても言えるだろう。両者の間には20年余の歳月が経過している。「思想革命を敢行する人々」と「詩人」とを同一レベルに考えようとするシェリーにはそこにもブレイクとは別な種類の異常性が認められよう。しかしシェリーは詩の表現と内容の問題について、プラトーン、キケロ、ペイコンと同時にシェイクスピア、ダンテ、ミルトンを頭におきながら断定した言葉である。おそらく思想革命家としての自分にたいする過信があったのかもしれない。それはワーズワスにはみられない点である。しかし詩はすでにそういった革新家としての個々の人間の営みである以外にはあり様もないのである。個々の人間にたいする信頼感としてこれ以上のものがありうるだろうか。そこでこの個人にたいする信頼感こそ19世紀イギリス詩の、とくにロマン詩の、成立する前提条件であったと言えるであろう。それはまた時代的に言えば近代ヨーロッパの産物でもあったのである。

2. 想像力の危機

ロマン派詩人の世界がこのようにして成立した時、すでに第2の問題として、新しい断面が示されてくることもまた避けることはできなかった。いわば個性化による危機の一面である。詩人は頼るべきものとして自分の

1) Carl Woodring: *Politics in English Romantic Poetry*, p. 94.

想像力以外には何物もない。想像力によって描き出される幻像やヴィジョンを歌うことによって初めて個性的な、オリジナルな作品を創造することができる。このことは逆に言えば、詩人が想像力の衰退を自覚するか、ヴィジョンの消滅を意識した時ただちに訪れる危機を暗示している。この意味ではワーズワスの“Immortality Ode”（『不滅の頌』）もコールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）の“Dejection: An Ode”（『失意の頌』）も共にそういった危機の偽らざる告白であったと言うべきだろう。とくにワーズワスがその作品を書きはじめた1802年3月第4スタンザまで書いて中絶し、完成するまでに2年近い歳月を要したことは、この危機の深さを物語るものであろう。

またこの危機の本質を暗示する言葉としてロマン派詩人の想像力についてつぎのような言葉がある。「イギリス・ロマン派の大作家の作品は生命力を中心とした理想主義をただひとつの源泉として派生した一連の対立物を内容とする、と考えることは適当であろう。対立を調和する根本的な力は、誰もが知るように、ロマン派の想像力である。」¹⁾ ここでいう生命力を中心とした理想主義（vitalist idealism）の一例としてワーズワスの言う自然の力を考えることができよう。自然と人間との関係において、自然の力が直接人間に働きかけることによって両者が和合するということは、たしかに理想主義的なヴァイタリズムであろう。そのことはワーズワスも自覚していたことであろう。なぜなら、こういった作品を書く場合、この詩人は回想詩の形をとることが多い。それはどこまでも自分の体験を中心にして、理想主義の夢に溺れることを極力避けようとしたように思われる。自然のなかから吹き寄せる緑の風が、いかなる書物よりもより多くのことを、人間に教えるという考え方は、すでに理想主義的ヴァイタリズムのギリギリの線上にあるのかもしれない。しかしこの傾向はキーツ（John Keats, 1795-1821）がギリシアの壺を見て、美と真との同一性を強調しようとする態度においても問題になる。とくに「想像力が美として捉えたものは真である」という言葉と同時に考えることが許されるなら、そういっ

1) Richard Harter Fogle: “A Note on Romantic Oppositions and Reconciliations,” *The Major English Romantic Poets*, p. 18. “...it seems politic to treat the work of the great English Romantics as a series of oppositions, all stemming from the single source of vitalist idealism. The prime reconciler of oppositions is as we all know the Romantic imagination.”

た想像力は明らかにロマンティックな想像力と言わねばなるまい。こういった想像力から生まれる詩作品について、シェリー流に言えば、「1篇の詩は不変な真実として描かれた生のイメージそのものである」ということになる。こういった想像力の所有者を「人間の神性」(“human divinity”)を持つものとして説明されたのである。

想像力にたいするこういった信頼感は、20世紀の読者の眼からすれば、あまりに理想的であり過ぎる。人間の能力自体について深い不信を直観している者にとっては、想像力の必要は当然としても、それに「神性」を与えることは不可能である。T. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888-1965) の後期の作品が示した宗教性と比較すればそれは明白なことである。また自然と人間との対立ということは認められるにしても、自然の力が直接人間に倫理的な働きかけをなしうるとは期待できまい。むしろ否定的な力として人間生活の秩序を破壊しようとする。したがって20世紀の現在からすれば、ロマンティックな想像力と言われるものにも限界があり、危機を内蔵していたことは事実である。その事実の上立って、19世紀の前半において新しい文学を形成していった経過とその必然性をたどってゆくことにしたい。

1. ワーズワス

1. ワーズワスの詩

ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の残した優れた作品の多くは回想詩である。*The Prelude* (『序曲』, 1850) はこの詩人の代表作品であり、イギリス詩史の上でも記念すべき長詩であるが、これが詩人の少年期から青春期へと成長する自己を物語った自伝詩であり、その意味では誰の目にもそれが回想詩であることは疑う余地もない。創作過程について、5巻本の定本ワーズワス詩集¹⁾の編者セリンコートはつぎのように言う、

最盛期につくられたある作品にたいしては可能なかぎりのあらゆる努力を払った。当然と言えば当然のことであった。いつもこの詩人は過去のなかに多くの生命を見出していた。最高度に強く新鮮な想像力を発揮した詩作品を詩人の心が常に忘れかねたのも致し方ないことである。²⁾

この傾向がワーズワスの作品研究にいまだに多くの問題を残していることは事実である。その一、二の点に触れておきたい。

1798年にコールリッジと共著で出版した *Lyrical Ballads* (『抒情歌曲集』) は1800年に再版をだしたが、それは1巻本から2巻本に増補されている。増補された作品の多くはワーズワスの作品であり、しかも再版の第2巻を

1) E. de Selincourt (ed.): *The Poetical Works of William Wordsworth*, 5 vols., O. U. P., 1900.

2) *Ibid.*, Vol. 1, p. vii.

第1巻と比較するなら、ただちに明白になることだが、この詩人の回想詩がとくに多く目につくという事実である。これは作者ワーズワス自身の創作意識になにか変化のあったことを予想させるし、また初版につけられた短い「まえがき」が再版では「序文」となり、詩人のポエティックスを述べたかと思われる文章に拡大されたことも事実である。これは推定される1つの問題点であろう。ここでは作品についてだけ考えてみる。

再版の第2巻に収められた作品のなかに、“Lucy Poems”(「ルーシー詩篇」)と呼ばれている数篇の短詩がある。創作時期は *Lyrical Ballads* を出版した後、コールリッジと共にドイツに渡ったワーズワス兄妹が1798年から99年の冬にかけてゴスラー滞在中に書かれたものである。その中の1篇はつぎのように歌う。

She dwelt among the untrodden ways
Beside the springs of Dove,
A maid whom there were none to praise
And very few to love:

A violet by a mossy stone
Half hidden from the eye!
——Fair as a star, when only one
Is shining in the sky.

She lived unknown, and few could know
When Lucy ceased to be;
But she is in her grave, and, oh!
The difference to me!

(大意：ルーシーはダブの泉に近く、人里離れて住んでいた。賞める人もなく、愛してくれる相手は望めない乙女であった。苔むした岩蔭の、ほとんど人目にもつかないスマレの花。夜空に唯一つ輝く星のような美しさ。生きた姿を知る者もなく、死んだ時を知る者もいなかった。いまは墓の中だ。私にとってその相違の大きさ!)

ルーシーが誰であるにしろ、回想のなかで捉えられた美しいひとりの少女のイメージであることには間違いなからう。人間世界から切り離れた少女のイメージを作り上げるに当たって作者は特別な意図をもっていたのではないかと思われる。第1、2スタンザは過去の姿を描き——この詩の原稿には最初にもう1スタンザあって、少女の姿の美しさを感じ覚的に説明し

ているが——第3スタンザでは過去と現在とを対照しながら、回想の実体を説明する。この構成をさらに言いかえれば、第1スタンザは事実の描写であり、第2スタンザはその象徴化と言えるし、第3スタンザは象徴化された幻像の崩壊とその結果である。そこでこの回想の実体についてふた通りの解釈が出てくるのではあるまいか。

(1) まず普通に考えられることは、象徴化された幻像の崩壊にたいする悲歎の声である。第3スタンザで書き分けられた過去と現在のコントラストは、言いかえれば、生と死の対照である。したがって、「その相違の大きさ」という最後の一句はこの対照に直面した作者の悲歎を間接的に表現したものである。たしかに作者は自分の悲しみを押えて表現し、それが逆に詩情の高揚をいっそうつよめていると考えることもできる。あるいは少女の生前に（過去に）感じていた自分の生命の充実感と比較して、その死後にとり残された自分の虚無感を回想のなかで哀歌風に捉えようとしたのかもしれない。

(2) しかし、この詩とまったく同じ時に、同じ素材を歌って、つぎのような作品も書いている。¹⁾

A slumber did my spirit seal;
I had no human fears;
She seemed a thing that could not feel
The touch of earthly years.

No motion has she now, no force;
She neither hears nor sees;
Rolled round in earth's diurnal course,
With rocks, and stones, and trees.

(大意：ねむ気が私の魂を封じ込んだのだ。それは全然思いもしないことだった。少女は地上の歳月の影響を超越した者のように思われたのだ。いま少女は身動きもしない、その力もない。目も耳も効かない。岩や石や木といっしょになって、地球の自転軌道をまわる。)

こういった大意のこの詩は(1)の詩の第3スタンザにみられた生と死の対照だけに光を当てている。そこでこの詩の第2スタンザをみると、生命から離れた少女は(1-2行)、地下に埋められ('rolled down')ながら、自然と

1) Cf. Mark L. Reed: *Wordsworth: the chronology of the early years, 1770-1799*, p. 257.